時評

AIについて

佐佐木定綱

大AI時代である。発端はChatGPTという対話型AI。何ができるのかというと、大体何でもできる。こちらの質問、命令次第だ。他愛のない日常会話から、聞いたこともない料理の作り方、一行もわからないプログラミング……。（良識あるAIなので差別や犯罪など以外は）なんでも答えてくれる。

では歌人と歌に何をしてくれるのか。現状では実作は微妙である。

・桜散る 春風に舞う 愛の誓い 心に深く 刻みつけてゆく

「最高の短歌を作ってください」とお願いした結果だ。頭はいいがセンスがまるでない優等生のような歌を次々と出してくれる。「桜」と「春」は言葉の意味が近すぎるし、「愛の誓い」を「心に刻みつける」はやりすぎだろう。そもそも五七五七七に合わせた語形の変化させることや言葉を選択することがまだ難しいようだ。さらに意図がハッキリと内包されている歌しか出てこない。ただ、これは短歌の語形や秀歌と言われる歌の学習、さらに日本語の能力が深まればそのうち解消されるだろうと思っている。

朝日新聞社で「俵万智×AI短歌」という企画があり、俵万智の歌集の作品二三六八首を学習させたAIが出てくる。出てくる語彙や使い方も俵万智作品らしさが追加されて、面白い。個人でこのデータ入力ができるようになればと思っている。作風の重み付けの学習や切り替えができれば、もっと色々遊べそうである。

その代わり現時点でも解釈は非常に優秀である。

例えば先程の歌の評を頼むと、

「桜散る 春風に舞う」の部分は春の新鮮さと再生の象徴として理解できます。一方で、「桜散る」は儚い美しさも示唆していて、人生や恋愛の無常性を象徴しています。

次に「愛の誓い 心に深く 刻みつけてゆく」の部分では愛情が深く心に刻まれるという比喩が使われています。愛の誓いは時間をかけて心に刻まれ、それが永遠性を示しています。

全体として、この短歌は春バックグラウンドに、愛とその誓いの深さ、そしてその美しさと儚さを巧みに描いています。

とスラスラ答えてくれる。そんないい歌とは思わなかったが、案外いい歌かも……と勘違いしそうになるほどもっともらしいことを言ってくれるのが特徴である。政治家のようだ。とはいえ、気づいていなかった読みや視点、意味などを提示してくれるのは非常に有用である。他者の歌だけでなく、自作を投げてみて、評を二十四時間いつでも聞けるというのは大変なメリットだ。

ただ、当然問題点もある。データからパターンを分析して、言葉の組み合わせを出力するために、オリジナルだと思って流用すると知らないうちに著作権に引っかかる可能性がある。さらに、それなりの歌が生成でき始めれば、一首で勝負するような歌会や投稿歌などは大きな問題になるだろう。

短歌の世界に影響が出てくるのはまだ少し先の未来かもしれないが、良い方にも悪い方にも大変な変化が起きそうで、ただただ楽しみである。